海没

小郡市　　松尾　弘

大君の命（みこと）畏み磯に触（ふ）り
　海原（うのはら）渡る父母を置きて
　　（万葉集四三二八）

昭和１９年１１月１５日正午過ぎ、私は沈みゆく輸送船上から東シナ海の波浪の中に身を躍らせていた。長崎県五島列島北端、宇久島西北西５０海里の海上である。数え年２２才の秋であった。

当時はいわゆる太平洋戦争の最中で敗色既に覆いがたく、マッカーサー率いる米軍がレイテ島に上陸したのが１０月２０日、以後同島では熾烈な攻防戦が続き、神風特攻隊を初めとするレイテ決戦の火蓋が切られていた。

同年９月、旧満州（現中国東北部）の砲兵から船舶に転じた私は、海軍兵学校のある江田島北部の幸浦に設けられた基地で水上特攻（爆装モーターボート）の訓練を受けていたが、１０月１５日動員下令、比島（フィリピン）派遣最後の海上挺身戦隊の一員として、１１月３日宇品で「あきつ丸」に乗船した。

翌朝「あきつ丸」は一路朝鮮（現韓国）の釜山に直行、歩兵第６４連隊主力他を乗せて門司に折り返し、ここで各学校を繰り上げ卒業した南方要員の少年兵多数を乗せて、六連泊地で他の輸送船と共に機の到るを待った。いずれの輸送船も将兵、武器、弾薬を満載して、その吃水は深かった。

「ヒ８１船団」として１１月１３日門司を出撃した。この船団は満州北端のハイラルから決戦場に急行する第２３師団（旭）を主力とする各部隊で、第８護衛船団司令官、佐藤海軍少将座乗の海軍特設運送艦「聖川丸」を基準船に、「みりい丸」などタンカー５隻、「あきつ」「摩耶山」「神州」「吉備津」の陸軍特殊艦（上陸用船艇母艦）４の計１０隻、いずれも１万ｔ級を護衛空母「神鷹」、直衛駆逐艦「樫」「大東」「昭南」などの海防艦５隻は護衛するという、当時の日本としてはなけなしの、そして最高の船団であった。

『魔のバシー海峡』のことは出航時私も耳にし覚悟もしていたが、門司を出て僅か２日後に海没しようとは全将兵が全く思いもかけぬことであった。この船団は上海に着くまでに１５日に「あきつ丸」、１７日に師団司令部乗船の「摩耶山丸」、そして空母「神鷹」と、何れも敵潜水艦の攻撃を受けて被雷沈没し、加うるに１７日夜半から翌早朝にかけては、後続していた「ミ２７船団」も同海域で敵潜の猛攻を受けて８隻中４隻沈没、大破１隻という惨憺たる被害で、米海軍潜水艦史や暗号戦史（船団暗号が解読されていた）にも特筆されている。

２群６隻（当時米軍は３隻１群の狼群戦法を採っていた）の米潜による両３日の被害小計は

沈没だけで計７隻、６万３５００余ｔ、１万を越す陸海将兵を失った。そして沈没を免れ無事比島に着いた者も、翌２０年１月９日以降の惨烈な戦いの中で、戦後無事帰還できた者は数少ない。

私の部隊は約半数の隊員と肝心の舟艇を失ったため台湾で再編することとなって、結局比島に渡る機会を失った。私は図らずも生還する羽目となったが、今でも１１月の海没月が来ると東シナ海の波濤の中に私の思いは飛ぶ。流出した重油の海で、寒さと疲労で１人、２人と波間に沒して行く戦友達、中でも「母ちゃん、母ちゃん」と叫びながら死んで行った同乗少年兵の姿は瞼の裏に焼き付いて今でも消えない。満で言えば１７、８才、中には１６才の者もいたという。戦争とはいえ余りにも早過ぎる死であった。

昨今、豪華客船の就航が相次いでいる。「ふじ丸」「おせあにっく・ぐれいす」「クリスタルハーモニー」「飛鳥」などなどである。上海、香港などは手軽な船旅となった。

『金満日本の新・航海時代』といつかの新聞は報じていたが、『時間貧乏、仕事中毒の日本人』に『こんなに早く本格的な船旅の時代が来た』とは新聞紙ならずとも驚く。ともあれ、平和日本の象徴として私も受け止めたいが、それと共にクルージングの旅人達に寄せる思いがある。

旅人たちよー
　願わくば一輪の花を　その洋上に捧げられんことを
そは過ぎし日の戦いの海なり　散華の海なり
その蒼き海
　暗き、果てなきその底には　今なお幾千幾万の英霊眠れり
平和を希（こいねがい）いつつ　国に殉ぜし人々なり
旅人よ……心あらばー

太平洋戦争で終戦までに喪失した船舶（艦艇を除く）は実に２４００隻余、８００万総ｔに上る。将兵、武器弾薬、軍需品、資源の喪失もまた膨大な数字を示すであろう。そしてこれはまた敗戦の重要な原因であった。

私は海を見るたびに、いつかの歌会始めの記事で読んだある御遺族の詠進歌を思い出す。確か「海」という御題で、ソロモンで戦死された弟さんを偲ばれた歌であったが、私はこう読み替えて口ずさむ。墓標もなき千尋の海底に眠る戦友達へ、鎮魂の思いを込めて…。

南（みんなみ）に続くこの海凪ぎ渡る
　　鴎（かもめ）となりて還れ戦友らよ　　合掌